



目次

TNVN2024年度講演会..... 1,2
 オンライン教材紹介と活動事例「つなひろ」..... 3
紙上講座 寄り添える日本語支援
 教室の外の自己表現 4,5

日本語教育レポート 無料初級日本語教室 江東区の場合... 6
Nice to Meet You 西堀 孝文 「八王子にほんごの会」..... 7
column AI時代の日本語ボランティア活動 8



TNVN
ホームページ
QRコード

《TNVN2024年度講演会》

10月19日土曜日午後2時から TNVN 主催で会員のための講演会が開かれました。講師として文部科学省総合教育政策局日本語教育課専門官の北村祐人氏に、「国内の日本語教育の動向～新たな制度と地域における日本語教育に焦点を当てて～」という題でお話しいただきました。当日はオンライン開催で、参加会員数は44人でした。

以下は北村氏の講演内容の抜粋です：

<国の立場から>

国としては日本語教育をいかに全国的に行き渡らせるかという課題意識から、日本語教育空白地域に取り組んでおり、その結果空白地域が減少してきています。ただ、現在は教え方も多様化していて、オンラインで日本語教育を展開しているところも出てきているため、見方を変えていくことを検討しています。

<法律から>

令和元年6月に施行された「日本語教育の推進に関する法律」は、日本語教育全体を視野に入れたもので、日本語教育機関、教師、地域日本語教育、難民、など全ての基盤になるものです。さらに、政府が閣議決定した「外国人との共生社会の実現に向けたロードマップ」は、外国人に関する政策全体を網羅するものです。これには、目指すべき外国人との共生社会のビジョンとして3つ（1.安全・安心な社会、2.多様性に富んだ活力ある社会、3.個人の尊厳と人権を尊重した社会）、その下に取り組むべき中長期的な課題を4つ（1.円滑なコミュニケーションと社会参加のための日本語教育等の取組、2.外国人に対する情報発信・外国人向けの相談体制の強化、3.ライフステージ・ライフサイクルに応じた支援、4.共生社会の基盤整備に

向けた取組）を挙げています。注目していただきたいのが、日本語教育がこの課題の中に位置付けられていることです。令和元年の法律は日本語教育に関するものとして初めて単独で出てきたもので、日本語教育の目的や定義があることも意義深いですし、国の責務、地方公共団体や事業主の責務、そして連携の強化が挙げられていることも重要だと思います。

<日本語教育の参照枠>

日本語学習と評価についてどう考えたらいいかを示すものが「日本語教育の参照枠」(以下、参照枠)ですが、参照枠では5つの言語活動として、1.聞くこと、2.読むこと、3.話すこと(やり取り)、4.話すこと(発表)、5.書くことが示されていて、言語を使って「できること」(Can Do)について言及しています。参照枠のレベルは学び始めのA1からレベルが高くなっており、C2までの6段階で示されています。



2024年度オンライン講演会の様子

「地域における日本語教育の在り方について」の報告にもありましたように、生活分野においてはA1からB1までを目指してもらおうとっています。さらに一義的には地方公共団体に対してB1までのプログラムの編成を提案しています。それは、日本語教育の推進に関する法律に基づく基本方針で、自立した言語使用者として必要となる日本語能力の習得を位置付けているからです。また、地方公共団体に対しては、専門性のある日本語教師の配置や日本語教育機関との連携の提案もしていると同時に、任意・善意で地域日本語教育を支えてくださっている皆さんの存在も大切にしつつ進めてくださいとお願いしています。

<「生活 Can do」について>

生活 Can doとは、「生活者としての外国人」が日常生活において日本語で行うことが想定される言語活動を記述文の形で例示したもので、生活上の行為の事例を10分野で挙げてあります。これを皆さん方の教室活動でも使っていただきたいですし、できるようになったかどうかを測定するためにも参照していただきたいです。

「生活 Can do」について

「生活 Can do」は、国内に在住する外国人（「生活者としての外国人」）が日常生活において、日本語で行うことが想定される言語活動を例示したもので、「日本語教育の参照枠」に示された分野別の言語能力記述文（Can do）の一つ。

対象となる範囲 「地域における日本語教育の在り方について」（令和4年11月、文化審議会国語分科会）に示される「生活上の行為の事例」（p.79参照）

生活上の行為の事例	I 健康・安全に暮らす II 住居を確保・維持する III 消費活動を行う IV 目的地に移動する V 子育て・教育を行う	VI 働く VII 人とかかわる VIII 社会の一員となる IX 自身を豊かにする X 情報を収集・発信する
-----------	---	---

レベル
基礎段階の言語使用者（A1、A2）から自立した言語使用者（B1、一部B2）までを想定

言語活動
聞くこと、読むこと、話す（やり取り）、話す（発表）、書くこと

例
<やり取り・A1>店で買い物をするとき、買いたいものや個数を伝えることができる。【Ⅲ消費活動を行う】
<読むこと・B1>適切な医療機関を選ぶために、病院のサイトなどの、ある程度長い文章に目を通して、診療科目や診療内容など、必要な情報を採り出すために読むことができる。【Ⅰ健康・安全に暮らす】

<地域日本語教育コーディネーターとの連携>

先ほどの報告では、地域日本語教育においてコーディネーターを配置することをうたっています。地域においては、日本語教師と日本語学習支援者が直接指導する立場で、コーディネーターは直接指導することではなくアレンジする立場です。これらの皆さんが連携して教室や教育現場を作っていくってほしいと思います。

<来年度の予算について>

現在、令和7年度の予算要求をしているところですが、「外国人材の受け入れ・共生のための地域日本語教育推進事業」の予算は6億2千万円です。これまで地域日本語教育はボランティア等に支えられてきており、自治体の取り組みは後発的です。この事業は、それを打開するために都道府県・政令指定都市に体制をつくるものとして推進しています。国としてはあくまでも地方自治体のサポートをするという立場です。日本語教育実施の責務を位置づけられた市区町村が直接日本語教育を行う、都道府県・政令指定都市の役割としては人材育成や補助金を出すといった後方支援をする、国がそれを経済的に支援する、という関係になります。国から交付されるのは掛かる経費の二分の一が上限、地方公共団体の財源を活用できる制度もありますが、市町村にも一定の負担をしていただく、ということです。

日本語教室がない地域への支援制度ですが、教室を作ることとICT教材を使って遠方からケアするというこの両輪でアプローチをしています。

<日本語教育機関認定法について>

これは令和6年4月にできた新しい法律ですが、「1.日本語教育機関の認定制度の創設」と「2.認定日本語教育機関の教員の資格の創設」があります。1について、これまでは類似の制度として法務省が告示をもって日本語教育機関を定めていましたが、これからは文部科学省が教育機関として認定していきます。分野もこれまでは「留学」だけでしたが、「就労」と「生活」を新設しました。留学はB2以上、就労・生活はB1以上という目標も設定されます。2については、登録日本語教員を国家資格化しますが、資格取得ルートはいくつかあります。これまで法務省告示の教員だった人も、新制度と同等の能力が認められる人は試験等が免除される制度もあります。今年11月に国家資格のための試験である「日本語教員試験」が初めて実施されます。（文責 山形）

なお、講演資料はTNVNホームページに掲載されていますので、ご参照ください。

<https://www.tnvn.jp/wp-content/uploads/2024/10/TNVN2024年度講演会.pdf>

オンライン教材紹介と活動事例「つなひろ」



TNVN network news123号では前号に続き、オンライン教材を会員の使用事例でご紹介します。

日本語学習サイト「つなひろがる にほんごでの暮らし」(通称「つなひろ」)は2020年文化庁が、近くに日本語教室のない地域に住む外国人が生活に根差した日本語をweb上で学べるように、開発しました。生活の場面を再現した動画と、そのセリフは、ローマ字と多言語に対応しています。今年新たに子育てや教育についての動画を収録、49場面(18言語)になり、現在は文部科学省が運営しています。

【事例1】足立区「かけはし」Nさんの事例

Q1「つなひろ」は、教室で使いましたか？

端末はスマホ/タブレット/PCでしたか？

A1 教室にはWIFIがありますが遅いので、1対1の対面支援のため、スマホからテザリング使用。ipad ミニ画面の映像を学習者と一緒に見ました。

学習者のタイ人女性(日本在住10年以上)は、会話を上げたい希望があり、「つなひろ」レベル1,2のスーパーや病院などの会話を選択しました。

- ① まず動画を一緒に見て、この人は何をしていますか、何がしたいですか、などの質問をし、
- ② わからない言葉などがなければ確認。
- ③ スクリプトをみながら、音読。お客さん役とお店の人役でそれぞれ私と分かれ、合計二度ぐらい読みました。

私は音読だけでしたが、スクリプトを見ながら、シャドーイング(音声を聞きながら1語ほど遅れて復唱するやり方)をしたあと、見ないで言えるようになるまで練習すれば、もっと発話力に効果的だったのではと思っています。

【事例2】多摩市国際交流センターでの事例

Q1「つなひろ」は、教室で使いましたか？

端末はPC/タブレット/スマホでしたか？

A1「つなひろ」は、コロナ禍の頃から、ズーム(PC)で時々我流に使います。学習者Nさん(フィリピン人女性B1レベル)は、読める漢字を増やす事、滑らかな会話が目的です。

A1 平日の対面教室(WIFI有)で、「つなひろ」を使用。学習者Neさん(タイ人女性)とKさん(アメリカ人女性)は、共にA1レベル、スマホ使用。「つなひろ」子育て編の紹介を契機に、スマホでの日本語学習を試みたかったですが・・・

Q2 紙教材、資料は？

A2 ① 外国人のための18か国語で書かれた「つなひろ案内パンフレット(A4判二つ折り)」があります。導入は支援者から対面では是非！



② 支援者に重宝なのは、「つなひろ使い方ガイドブック」です。つなひろの全体が見渡せます。使いたい場面を探すのに、レベル別場面画像入り「シーン概要」がわかりやすいです。冊子後ろの索引は、動画視聴では記憶に残りにくい言葉、文型等を整理してくれます。また、各場面のせりふ日本語文は、「読み」の仕上げ確認に使えます。

Q3 学習手順は？

A3 (Nさんの場合) ① 学習場面を選び、動画と声に集中して視聴します。

② 時々動画を止めて音声が残っているうちに、セリフ画面を見ながら真似て言ってみます。

③ その画面下に、「スクリプト」「このフレーズを覚えよう」「このことばをおぼえよう」の表があり、左の欄「スクリプト」を選びます。選択した3言語(日本語、ローマ字、母語)が三分割の表で表示されます。動画音声と連動しない字幕なので、ゆっくり音読できます。PC使用のNさんにはこの表が一番役立つそうです。真ん中のローマ字欄で読み方を、母語欄で意味を理解しながら、音読します。

A3 (Neさん、Kさんの場合)

本来「つなひろ」導入は、サイト内の学習者のレベル判定機能の使用から始めるべきでしたが、学習者の希望を優先し、動画を視聴。

→結果、「セリフをみても、どの語がどの意味かわからない」が、学習者の感想でした。時期尚早でした。

A3 (追加：クラス全体への活動紹介)

つなひろに、暮らしに最も大切な防災や、緊急時対応情報の動画もあります。クラスの支援者にサイトを伝え、学習者との視聴を依頼しました。(シーン5-3) (シーン9-1)

<https://tsunagarujp.mext.go.jp/level03/c02>と

<https://tsunagarujp.mext.go.jp/level02/b06>

いろいろ使える「つなひろ」です。皆様で是非情報交換を!

(文責 山内)

寄り添える日本語支援

教室の外の自己表現

日本語教師 金子広幸

私が駆け出しの頃、日本語学校にはおよそ2年に及ぶ大きなカリキュラムがありました。その中には、初級・初中級・中級・上級というレベルがあって、多くの学生が長い道を辿っていく方向性が示されていました。

これは海外の日本語クラスでも、大きな差はありませんでした。

よく考えると、その道を辿り終えた学習者は、確かにそれ相当の安定した日本語能力がついたかもしれませんが、個々の学習者への自己実現のサポートになっていたかは、疑問の余地がありました。当時のビジネスパーソンなど、日本で働いていた人には、合わないカリキュラムで、感覚的には、自己実現は学習者個人に任されていたように思います。

その様相に変化が現れたのは、私が日本語教師になって10年以上経った90年代後半でした。

学習者がひとりひとり違うのですから、求めるものが違うのは当たり前ですね。そのことを日本語教育界が気づいたのだと思います。

ある大学には、学習者自身が自由な課題解決の予定を自分で立てて、教師はそれをサポートするという単元がありました。このクラスは、1単元の中で「教えなければならないもの」は存在しませんでした。クラス初日にはガイダンスが行われ、どのように教師が関わるか、自分でどのように予定を立てるかなどを紹介しました。

そのクラスでの学生との出会いは私にとっては大きな意義がありました。

ゲームの中に登場していたキャラクター「アマテラス」が気に入って、日本神話の本当の天照大御神について調べ、伊勢神宮まで行って写真満載の小冊子を作った人。

聴解力を自分で鍛えたいと表明して、自分で本を選び、毎週のクラスで2つずつ聞いて、その結果をグラフ化して、私に見せながら相談した人。

研究論文の要旨を書くので、それをメモ書きから始めて、毎週出来上がったものを私に見せに来て、ついに3ヶ月かけて完成させた人。

ボランティアさんをお願いして、その人に毎週違うテーマでインタビューを行い、その内容について、小さなレポートを書きためていった人。

自分の好きな物語の朗読にチャレンジ、録画や録音を十分に駆使して、自分の日本語の発音をしっかり直していった人。

自分の故郷を紹介する画像を集め、そこにアナウンスをつけて、1本の映画を作った人。

…今でも、それぞれの自己実現を叶えていった、ひとりひとりの様子をありありと思い出すことができます。

…私は大変でした。どこからどんな質問が来るかわからないので…。でも楽しかったです！

「学校には先生がいて、先生がそのクラスを率いて学生を鍛えるものだ」と思っていた学習者たちからは一定の抵抗もありましたが、クラスの趣旨を理解すると、多くの学習者は、水を得た魚のように、悠々と泳ぎ出していきました。もちろん、途中でつまづいてしまったり、うまくいなくて方向転換したりした人たちもいましたが、その過程そのものが学習の機会となっていたのだと思います。「人生には、ほんの一瞬でも無駄な事は無い」京都の有名なお寺の山門に掲げられていた言葉ですが、このクラスを担当しているとき、常にこのことを思いました。

それまでの私は、教室の中でしか学習者を見ていなかったのかもしれませんが、そのとき初めて学習者が教室の外でどのように自己実現していくのかというのを見た？ んっ？ 見させられた？ いやいや、見させてもらった？ そうです、見せてもらった！ のです。

私自身が英語を不得手に感じる理由は、英語を使った自己実現を考えたことがなくて、教室外の活動経験が極端に少ないからです。「英語を使って」

何かをする「自身」が想像できないから、「自信」も持てないのです。

これでも、初級クラスではときどき英語で解説していますし、学生からの相談・質問には英語で答えることもあります。そして、だんだん慣れてその部分だけは上手になりましたが、一般的な英語の能力が私には大きく欠けたままです。

…その点、中国語は中華圏で生活した時期が長いので、店で店員さんと仲良くなって、とっておきを選んでもらったりから、レストランで料理の説明を受けたりとか、大きな買い物をするときには、値引きしてもらったりして、交渉する経験もしましたし、人と討論して言い負かしたり、自分が気に入った文芸に触れたり、京劇を見に行ったり、それについて感想を語り合ったり、ついにはラジオで話してしまったりもできたので、どこかで「自己実現していた」のだと思います。つまり、中国語は文法などをそれほど学ばなかったとしても、曲がりなりに教室外でのキャリアが自然に積まれていったのでしょう。

シラバスという名前で示される日本語学校や大学などのカリキュラムは、これも最初は本当に不思議だと思いましたが、学習者の顔を見ないうちから決められています。そこに生身の学生を詰め込んでいくような、一見あべこべに見えるようなことをしなければならぬときがあります。先に箱を作って、その中に和菓子を押し込んでいくような感覚です。和菓子、壊れちゃう。

でも皆さんが関わっていらっしゃる地域の日本語支援の場所では、和菓子の形が先ですね？ そのひとつひとつのお菓子の形に合わせて、箱や包み方を考えていくのではありませんか？ その学習者がどのように自己実現するのかを主眼に置くことができますね？

私は心からうらやましいと思います。

本当は、学習者のために編まれた内容のカリキュラムで、学習者のため出された成績・コメントで、学習者のための日本語教育であるはずなのに、学校という組織に関わると、先に箱ができて、その中にどのように詰めるかというふうに、理論が進んでいってしまうんですね。

…それも仕方がないことですね。お菓子を食べたことがない人は、箱を外側から見るしか方法がないのです。

だから、箱から見ても中身が想像できるように、シラバスやカリキュラムを作るんですね。

…この私も箱作り・和菓子作りに長けてきましたよ。ふふふ。

と言いつつ、実は、私も、地域の皆さんが目指しているものと同じように、学習者個人が求めていることを最大限実現しようと尽力しています。読み物のテーマを学習者の好きなものに切り替えたり、教室外では就職活動や大学院の面接の相談を受けたり、発言の内容や論文の要旨を見てあげたりしていますので。

今また日本語教育は1つの曲がり角に来ているのかもしれません。

ある地域支援の場所で支援に関わる方からこんな発言を聞きました。

「私は学生の皆さんにはこんなふうに言っています。『私は日本語母語話者です。長い間、日本語を使って生活しているから、正しいか正しくないかだけは判断できますが、自分が話している言葉について客観的な説明を準備することができません。だから、どんな理由をつけるかは、学生の皆さんが自分でしてくださいね』と最初に言っているんです」とのことでした。

私は地域支援はこれでいいと考えます。

今は文明の利器が次々に開発され、今こうやって原稿を書いているだけでも、Google ドキュメント上でしたら、言葉や文脈の間違いを指摘してくれますし、オンライン上には翻訳機能や文法知識なども多く準備されていますものね。

…ここから先は、日の出の勢いでがんばっていらっしゃる若い日本語の先生たちにバトンタッチしようと思っています。



《東京都で始まった無料初級日本語教室：江東区の場合》

2024年8月4日、江東区主催で『無料の日本語教室』が始まりました。10月3日、区内の日本語ボランティアが江東区多文化共生担当を訪問してヒアリングを行いました。



質問：無料日本語教室開催に至る経緯を教えてください。

回答：2023年3月「江東区多文化共生推進基本指針」が定められ、2023年度に多文化共生担当ができ、日本語教室の開催が区で予算化されました。国・都の補助金も活用しますが、現状では都の補助金額は確定していません。運営はヒューマンアカデミー（株）に委託しています。区としては初めての日本語教室開催なので、実施に当たっては手探りの状態が続いています。

質問：2024年度開催コースの概要を教えてください。

回答：コース1《入門編》は、「日本語をはじめて勉強する15歳以上を対象」とするコースです。

期間は8月4日～11月30日で全16回。原則として毎週土曜日の13:30-16:30に実施。江東区在住者のみが受講できます。35人の応募があり、レベルチェックをして定員の15名に絞りました。現在の学習者は10名前後です。

コース2《初級編》は、「ひらがなカタカナが読める15歳以上を対象」としています。

期間は10月5日～1月25日で、回数や応募条件はコース1と同じです。定員は20名で応募者は44人でした。

質問：既存のボランティア日本語教室の情報は区も持っていると思いますが、あえて区主催の「無料日本語教室」を始めたのは？

回答：学習の進め方に検討の余地があると思っています。まず、学習の場の入口を外国人に知らせることを目的にしています。その後は、ボランティア教室や色々な方と協力して進めたいと考えています。

質問：本年度の日本語学習修了生に対して次の日本語学習をどのように考えていますか？また本年度受講できなかった方々へは？

回答：修了生たちと区が繋がれる仕組みを考えています。SNSを利用して修了生のグループを使って次の日本語教室の情報を提供することなど試行錯誤中です。

本年度受講できなかった方々へは、ボランティア教室の紹介を考えています。

質問：ボランティア教室は（公財）江東区文化コミュニティ財団の研修室を借りて活動しているため、部屋代を学習者に負担してもらっています。区の教室は無料だったのに、更に学習したいと思ったら有料になることを学習者に理解してもらうのは難しいと思いますか？

回答：区は現在無料で開催していますが、受講者のモチベーションを上げるためにも、いくばくかの費用負担をしてもらったほうが良いかもしれないと検討中です。

質問：日本語ボランティアには長く活動をしている人が多いです。色々な経験・知見があります。窓口を設けて、区とボランティアが連携する考えはありますか？

回答：日本語教育の内容・時期・受け入れ体制など、意見交換しながら進めたいと、枠組みも含めて考えています。

質問：区立中学校の先生から、「生徒を夜のボランティア教室へ行かせたい」という相談を受けます。多文化共生担当と教育委員会との連携はどうなっていますか？

回答：現時点で連携はありません。

★日本語ボランティアからは、情報共有の迅速化・部屋代の問題などの要望を出しました。

今回のヒアリングでは、区の方々の熱意を感じました。これを機に、日本語教室が関係している区・公益財団・日本語ボランティアネットが緊密に連絡を取り、日本語教育を良い方向に進めて、外国人にも日本人にも住みやすい江東区となることを願っています。

（文責 岡田）

はじめまして！
運営委員です

Nice to
Meet You

西堀 孝文

八王子にほんごの会(八王子市)



はじめまして。この度運営委員を担当させていただくことになりました西堀です。TNVN の活動には以前より興味がありましたので、参加させていただく機会をいただき光栄に思っています。私は日本語ボランティア活動としては八王子にほんごの会に 2009 年より参加しております。この会は、1992 年 12 月に発足し、現在八王子市内に 9 つの寺子屋（クラス）を持ち、会員数約 130 名、学習者約 170 名、合計約 300 名の日本の中でも大きな団体です。NPO の登録はしていませんが、役員を中心に総会の開催、定期的な幹事会活動などしっかりした運営を行っています。会の学習支援活動としては、基本はマンツーマンでの学習を週に 1 度 2 時間で行っています。その他の活動としては、寺子屋ごとの遠足、料理教室や年に 1 度の全体でのスピーチ大会などを実施しており非常に活発に活動しています。スピーチ大会は、大きな会場を借りて 15 名ほどの希望者が発表をします。手前味噌ですが、かなり発表のレベルは高いです。スピーチをやると飛躍的に日本語が上達するので準備は大変ですがやる価値は大きいと思っています。

私は 2019 年より 3 年間代表を務め、現在はその当時に開設した駅前日曜日の寺子屋で活動しています。駅前日曜を開設したのは、日曜日に学習者の希望が多いためです。意外と日曜日に開設しているボランティア団体はなく、近隣の県、市などから通っている方もたくさんいます。学習者は社会人も多いので彼らにとっては日曜日が一番通い易いようです。また、私どもの寺子屋の一つに子ども支援というのがあり、中学生を主に対応しており、そこでの活動も数年間実施しました。中学生は十分に自国で日本語学習することなくやってくる

ことが多く初心者であることが多いのですが学校に通っていただければ会話自体は半年くらいで上手になるのには驚かされます。ただ、公立の高校への入学希望者が多く、国語のみならず学校の勉強は大変ですが、優秀な子供たちはかなり勉強して中堅の高校に入学、その後大学に進学するには感心させられます。

会の運営では、学習者の数に会員の数が追いついていないこと、部屋の確保とその費用の捻出が課題です。八王子国際協会、八王子市多文化共生課などが支援をしてくださっていますがなかなか解決は難しいのが実情です。

また、私は 2017 年より八王子国際協会の日本語ボランティア養成講座の委員として参加し、現在は委員長を務めています。養成講座の活動としては、これからボランティアを始めようとした方々を対象とした“基礎講座”3 日間コースを年 2 回、すでに活動をされている会員を対象とした“ステップアップ講座”3 日間コースを年 1 回実施しています。基礎講座では、TNVN より金子先生に学習者の異国語を学ぶ大変さの体験、藤橋先生の教え方の体験などの講習していただき好評いただいています。昨年より実際の活動内容の詳細、注意点などを話した方がよいのではということで最初の 1 日は私の方で担当しています。ステップアップ講座では、川口 義一先生に何度かお願いしており人気の講座になっています。特に発音、イントネーションの教え方は私としてはとても参考になりました。

TNVN では、より大きな違った視点で日本語を必要としている方々に学習支援ができるインフラの強化のお手伝いできればと思っておりますのでよろしくお願い致します。



●全ニュースレターをホームページにアーカイブしました！

ニュースレターは前122号より紙の媒体から電子媒体へと進化しました。このタイミングに合わせ過去の全てのニュースレターをホームページにアーカイブしました。TNVN 創立時のニュースレター第1号(1994年2月発行)から第123号まで30年のTNVNの歴史をホームページよりご覧ください。

●12月13日(金)夜に交流会をオンライン(ZOOM)で実施します！

申込み不要、入退出自由の会員同志の意見・情報交換会を実施します。参加のためのZOOMリンクは11月下旬頃にお送りします。奮ってご参加下さい。

column

AI時代の日本語ボランティア活動

近年、人工知能(AI)技術は驚異的な進化を遂げ、私たちの日常生活や仕事のあり方を大きく変えつつあります。日本語ボランティアの活動においても、どのような場面でAIを活用できるか、少し考えてみました。

1. 教材作成の効率化

AIを活用した文章作成支援ツールにより、お知らせや教材の作成時間を短縮できます。ただし、最終確認は人の目で行い、正確さと温かみのあるコミュニケーションを維持することが重要です。

2. 個別最適化された学習体験

AIによる学習者の理解度分析を活用し、個々の学習者に適した教材や学習プランの提案が可能になります。インターネットを検索すると、AIを活用したアプリがすでに提供されているようです。

3. 発音練習・会話練習の補助

音声認識技術やチャットボットの進化により、学習者が24時間いつでも発音練習や基本的な会話練習を行える環境が整ってきています。これらのツールを補助的に活用することで、対面での活動をより充実したものにできます。

AIの進化は、決して人による支援を置き換えるものではありません。むしろ、AIを適切に活用することで、ボランティアの方々の負担軽減、データに基づいた学習支援の実現といった効果が期待できます。一方、学習者が悪用して作文やレポートに活用することもできてしまいます。しかしながら、当然それでは学力は身につくことはなく、学習者の自律性や自己コントロールが求められます。何事にもメリットもあればデメリットもあります。新しいものに目を向けつつ、面白そうなものはとりあえず取り入れてみて、使いどころを考えていく、という精神が大事ではないでしょうか。

(ホームページ管理担当：大滝 敦史)

東京日本語ボランティア・ネットワーク(TNVN)は都内のボランティア日本語教室のネットワークで、会員からいただく会費で運営している民間の団体です。会員は日本語学習支援活動を通して、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人を、隣人として支援しています。又、TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

◆日本語ボランティア相談窓口
日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えます。メールでお問合わせください。

*対面でのご相談にもお応えします。
ご希望の方は、以下メールで御予約の上、おいでください。

場所：東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線—出口 B2b)
飯田橋駅下車
セントラルプラザ 10Fロビー

◆郵送先
〒162-0823
東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

◆E-mail: office@tnvn.jp
◆ホームページ: https://www.tnvn.jp
◆郵便払込
口座番号：00100-1-719259
加入者名：東京日本語ボランティア・ネットワーク

◆会員(2024年11月15日現在)
正会員：84団体
個人協力会員：15名
賛助会員：4団体

◆編集／岡田美奈子、鈴木恵司、仁村議子
林川玲子、山内真理、山形美保子、渡辺紀子

「感想を是非、お寄せください」

123号アンケート

<https://forms.gle/Ayq5LAFRgy9yHMfS9>

